

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ブリ

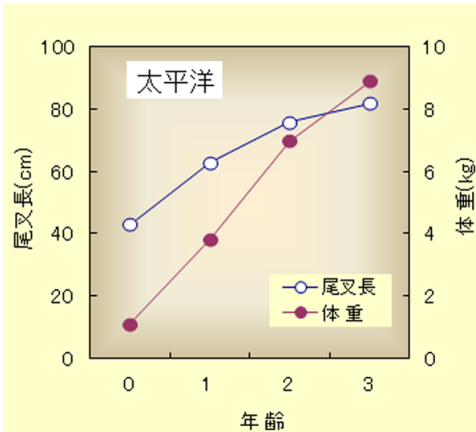
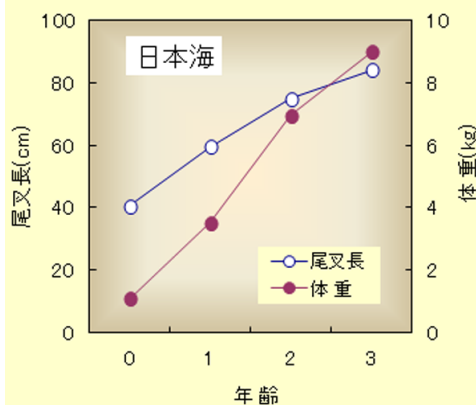
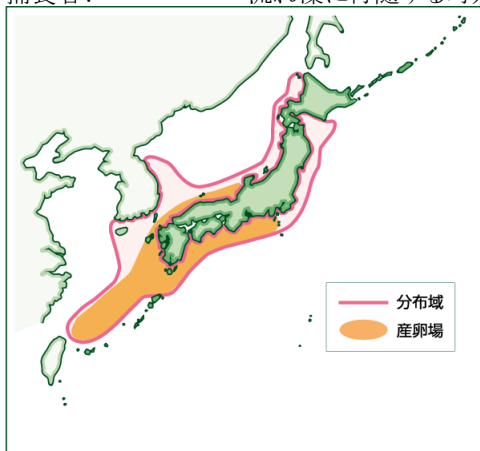
学名 *Seriola quinqueradiata*

担当水研 日本海区水産研究所
中央水産研究所



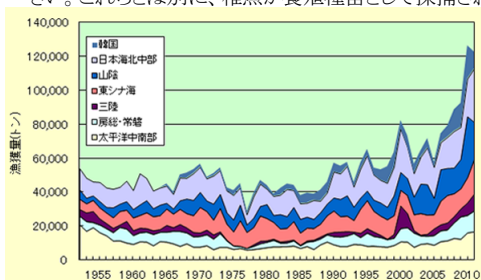
生物学的特性

寿命: 7歳前後
成熟開始年齢: 3歳(一部)、4歳(100%) (1月を誕生月とする)
産卵期・産卵場: 冬～初夏(1～7月)、東シナ海の陸棚縁辺部を中心として、九州沿岸から日本海側では能登半島周辺以西、太平洋側では伊豆諸島以西
索餌期・索餌場: 夏～秋季、九州沿岸～北海道沿岸の東シナ海、日本海および太平洋
食性: 仔稚魚は動物プランクトン、未成魚以降はイワシ類、アジ類などの浮魚類の他、底魚類
捕食者: 流れ藻に付随する時期には共食いをすることがある



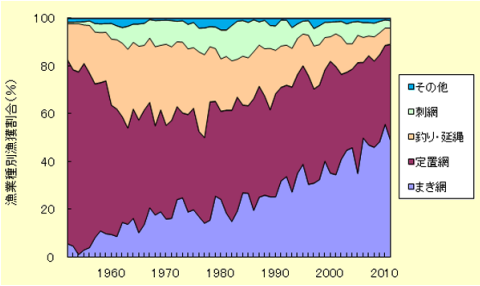
漁業の特徴

漁業の主体は定置網およびまき網であるが、まき網の割合が過去約50年間増加傾向にある。2010年ではまき網56%および定置網33%であったが、2011年ではまき網49%および定置網40%となった。東シナ海、山陰および房総・常磐ではまき網の割合が大きく、日本海中北部・青森・北海道、太平洋中南部および三陸では定置網の漁獲割合が大きい。これらとは別に、稚魚が養殖種苗として採捕されている。



漁獲の動向

我が国のブリ類の漁獲量は、1950～1970年代中盤には3.8万～5.5万トン、1970年代終盤～1980年代には漸減して2.7万～4.5万トン、1990年代には増加して4.3万～6.2万トン、2000年代にはさらに増加して5.1万～10.4万トンとなった。2011年には前年の過去最高(10.7万トン)を更新して11.3万トンとなった。韓国では、前年の1.9万トンから半減して1.0万トンとなった。

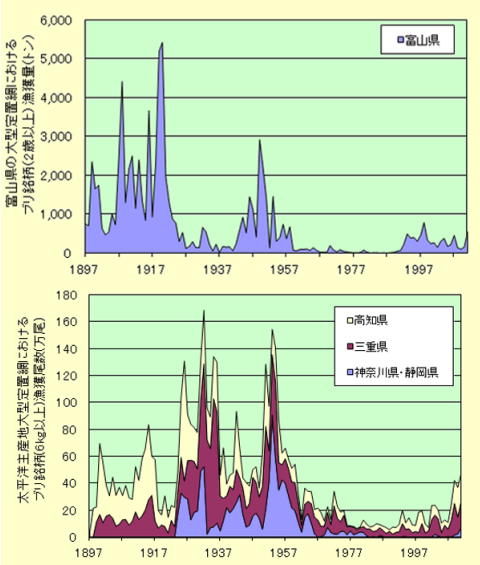
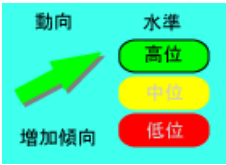


資源評価法

資源の水準の判断には、長期のデータがあり、漁獲努力量が比較的安定していると考えられる定置網の漁獲量を用いた。資源の動向の判断、および平成24年度ABC算定規則2-1)において係数を算出するための資源量指標値には、1994年以降の主要港の銘柄別水揚げ量から推定した年齢別漁獲尾数を用いたコホート解析によって得られた資源量を用いた。

資源状態

漁獲努力量が比較的安定していると考えられる定置網の漁獲量の最大と最小の間を三分割してそれぞれを高位、中位、低位とすると、2010・2011年は高位水準となった。コホート解析による近年(2007～2011年)の資源量は増加傾向にあり、2009・2010・2011年級群の豊度は高いと考えられた。2011年の三陸の定置網では、大津波によってその稼働数が大幅に減少したにもかかわらず、0歳漁獲量は2010年より増加した。全体として0・1歳の未成魚中心の漁獲形態ではあるものの、近年の定置網におけるブリ銘柄の漁獲は、日本海側では1990年代以来の水準を保ち、太平洋側では1960～1970年代の水準にある。



管理方策

高位水準・増加傾向と判断される本資源の管理目標として、近年の資源水準に見合った漁獲を行うこととした。一方で、漁獲物の年齢組成は0・1歳を中心とした未成魚に大きく偏っており、未成魚への漁獲圧が高いことが示されている。ブリは、漁業種類や地域によって利用している漁獲物の年齢や漁期等が異なるので、その実態を勘案したうえで、資源の有効利用の観点で海域および漁業種類毎に利用形態を検討する必要がある。また、幼魚から成魚まで年齢毎に漁獲努力をコントロールし、親魚量を確保しながら年齢バランスの取れた資源利用形態の構築を図るべきである。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	112千トン	$1.0 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.13$	—	—
ABCtarget	90千トン	$0.8 \cdot 1.0 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.13$	—	—

- 平成24年度ABC算定規則が改正され、ABCは $\text{ABClimit} = \delta_1 \cdot \text{Ct} \cdot \gamma_1$ 、 $\text{ABCtarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$ で計算した
- δ_1 は資源水準によって決まる係数で、高位水準の標準値は1.0
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、bとは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である
- Cave3-yrは過去3年間(2009～2011年)の平均漁獲量

資源評価のまとめ

- 2011年における我が国のブリ類漁獲量は11.3万トンとなり、前年の過去最高を更新した
- 漁獲量の増加は、資源量の増加に加え、1950年代以降に漁獲量割合が増大し続けているまき網による影響が大きい
- 定置網による漁獲量から資源水準は高位と判断
- コホート解析で算出した近年の資源量から資源動向は増加と判断

管理方策のまとめ

- 近年の資源水準に見合った漁獲を行うことを管理目標とした
- 漁獲物の年齢組成は0・1歳を中心とした未成魚に大きく偏っており、未成魚への漁獲圧が高い
- 海域および漁業種類毎に利用形態を検討する必要がある
- 年齢毎に漁獲努力をコントロールし、親魚量を確保しながらバランスの取れた利用形態を取ることが望ましい

執筆者: 田 永軍・阪地英男

資源評価は毎年更新されます。